

## 第 31 回自由学園音楽会

### 「はじめに」

武田若菜

今回の音楽会は、2年前から準備を始めました。第1部は各部の合唱、第2部では課外活動における研鑽の発表としました。また、12年ぶりにヘンデル作曲オラトリオ『メサイア』より抜粋で、男子部、女子部高等科以上の310名と、初めてリビング・アカデミー（45歳以上の方の学びの場）の方々が一緒に演奏をしました。

合唱曲の選曲については音楽教科教員で話し、創立100周年を目前に控えた音楽会であることから、自由学園の音楽教育の中に受け継がれている「いのち」を意識し、生徒たちの中にある、歌いたい、伝えたい思いを引き出せる曲であることを主眼としました。近年、学校として「主体性」を大切にしていることもあり、生徒のリーダーが中心になって、生徒全員で選曲に関わる試みもありました。

『メサイア』は、自由学園の音楽教育の歴史の中で大切にされている曲です。生徒達にとって難易度の高い曲であるため、指揮者の梅田先生には無理をお願いして、2年がかりでご指導いただくことになりました。

「救世主の誕生」、「受難」を経て、人間の「救い」、「永遠の命」に至る物語が、今生きている自分とどう関わるのか、歌詞を心の中で咀嚼し、自分の思いと重ね合わせて歌うことを願いました。また、楽曲表現にふさわしい音色を求め発声を変えていくことや、ハーモニーをつくり出すこと、それ以前に、音楽に心を向けることなど、課題は沢山ありました。

音楽会の目的は、当日の演奏の形が整うことではなく、むしろ過程にあると言えます。各部で毎朝行われる礼拝のたびに讃美歌を歌いますが、そこにメサイアの学びは反映されているか、それは音楽の技術的な質を上げるだけでなく、歌詞を自分のものとし、音楽を通して創造主に思いを馳せることを指します。音楽と礼拝の関係だけでなく、

美しい響きが創られていく過程では、人と人との間で意見のぶつかり合いもあります。様々な苦勞と共に、人も音楽も磨かれつつ本番へと繋がっていきました。その結果が「第31回自由学園音楽会」の演奏であり、どの演奏も聴く方の心に届くものとなったと思います。

また、演奏だけでなく、表舞台の成功を導いた多くの舞台裏の働きがありました。音楽会全体の企画運営をする者であっても、演奏者としての責任を果たす。これは教員であっても生徒・学生であっても同じです。舞台裏の役割も大切にすることは、互いを思いやると共に、演奏には妥協をしない厳しさを生み、会全体に引き締まった心地よい緊張感をもたらしました。更に温かな雰囲気をも醸し出せていたと思います。特に舞台上の運営については大変でした。舞台進行の学部生、椅子並べと舞台転換の責任を担った男子部中等科二年生は、度重なる舞台上の配置図変更にも忍耐強く対応し、当日は練習の成果が発揮されていました。その働きの陰には担当の先生方のご苦勞もありました。生徒たちとプロのステージマネージャーの方を上手に繋いでくださったお陰で、演目と演目の流れが途切れることなく、生徒たちも気持ちのよい働きをすることができました。これらも自由学園らしい音楽会の側面です。

音楽科以外の教科の先生方（英語科、国語科、美術、お習字など）にも、音楽を切り口とした教科横断的授業をしていただきました。更に、梅田先生はじめ、音楽関係の先生方の粘り強いご指導によって、生徒全員が演奏できることで満足せず、達成感を持てる演奏、聞き応えのある演奏にまで引き上げていただけましたことを心から感謝いたします。そして、この音楽会開催のためにご協力いただきました全ての方に重ねて感謝申し上げます。ありがとうございました。



弦楽オーケストラ



音楽を他教科で表現



ウィンドオーケストラ



男子部中等科



女子部中等科・高等科

グリーク



弦楽オーケストラ



メサイア



男子部中等科・高等科